公民館の図書室は　学びの入口・みんなの本棚

図書室月報

2026年（令和8年）
1月5日 第752号

PDF版

国立市中1－15－1
TEL.042-572-5141
FAX.042-573-0480
国立市公民館

2025年 印象に残った本

公民館図書室利用者・講座参加者の方に、
「今年印象に残った本」についてご寄稿いただきました。
皆さんのおすすめの本をご紹介します。

『水車小屋のネネ』
津村記久子（毎日新聞出版）

裏 由里子

毒親から逃れ見知らぬ土地で生活を始めた姉妹と、水車小屋で石臼の番をするヨウム（大型インコ）のネネ。姉妹がネネを通じて地元の人々との絆を深め、小さな善意を貫いながら成長していく40年間を描く。姉妹は自分を支えた「ささいな親切」を人々に還元し、他者を助ける人生を生きる。愛らしいネネと人々とのおしゃべりが可笑しくて、心がほっこり、やさしい気持ちになる。幸せな読後感だった。

『ジュージュー』
よしもとばなな（文春文庫）

上野 千晴

ママが死んじゃって、パパは元気がない。美津子は、ママの面影を感じてしまい寂しさでいっぱいだった。大切な人が居なくなって、いつもがいつもではなくなる。それでもその人が大事にしていたことは、誰かの心にちゃんと残っていて、それが前へと進ませてくれる。大変なことがあっても、人は幸せを見つけられる。ちゃんと。

『TRUK LAGOON トラック諸島 閉じ込められた記憶』
古見きゅう（講談社）

中井 あつし

２００７年から9年間、チューク（トラック）諸島の海に沈んでいる旧日本海軍の艦船や戦闘機を水中撮影した写真集。47の沈船と機体の写真を掲載。

ほとんどは１９４４年2月の米軍の空襲で撃沈された。魚雷や砲弾の痕も生々しいが、沈船の周りには美しい珊瑚が生育し魚たちの住処にもなっている。

沈んだ時間を指して止まっている腕時計や海底に眠る船は取材の間にも経年劣化で崩れだし、ここにも戦後の風化が見られる。

『具体と抽象 ―世界が変わって見える知性のしくみ』
細谷 功（dZERO）

香田 駿

この本は、抽象的にものごとを考えるとはどういうことかについて書かれている本です。具体的な考えはわかりやすく多くの人に伝わりやすい一方で、何かを発展させる際には抽象的な考えが必要になります。抽象化によって物事の本質を抜き出し、構造や関係性を捉えることで、複雑な問題もシンプルに見通せるようになります。そのために、具体↕抽象を往復しながらものごとを考えるためのコツやポイント、事例などが書かれています。私も普段から問題解決の仕事に携わっているため、この考えが非常に参考になりました。就職活動中の学生（特にシンクタンク、コンサルタントなどの分野）にオススメですが、読み物としても楽しく読むことが出来ます。ぜひ読んでみてください！

『ある女』

有島武郎集
有島武郎（講談社）

向井 誠一

武蔵境駅から北方向へ進むと桜橋という所へ出る。その下を玉川上水が流れているのだが、草木の茂りに阻まれ見通しづらい。しかしかたわらの石碑からここが国木田独歩の代表作『武蔵野』の舞台であったことが知れる。当作には記されていないが、彼はある女性と天にも昇る程の時を過ごしたことが知られている。しかしそれは永くは続かなかった。女に逃げられたためであった。有島武郎の代表作、『ある女』には、この女性の自由奔放ぶりが事細かに描かれている。そこには物静かに彼女を見守る青年が登場するが、有島自身の投影があるとされている。有島は専らヒューマニストを演じ続けていたが、後に己れの手で人生を絶った人であった。

結局は内に秘めていた情念のたぎりを押さえ切れなかったのであろう。この作品はまさに真の自分を吐露したものだったと云える。

『35年目のラブレター』

小倉孝保（講談社）

東（あずま） 健太郎

同タイトルの映画の原作ノンフィクション。西畑保さんは、小２の時不当に泥棒呼ばわりされていじめられたために学校に行かなくなる。ゆえに読み書きできないまま社会に出る。読み書きできるのが当たり前の世の中で、それができない苦しみはいかほどのものがあっただろうか？ それは大きな障害であり、その中で生きることは地獄だったとも言えるだろう。壮絶ないじめも受けた。それでも、自暴自棄にならず、楽しいことを見つけ明るく生きてきた。だからこそ後に妻となる皎子（きょうこ）さんと出会えたのだ。読み書きできないことを隠して結婚したのに、その事実を知ってもかえって彼女は同情してくれた。そんな優しい皎子さんに感謝のラブレターを書くために、還暦を過ぎて夜間中学に行って読み書きを習おうと思い立つ。そして、7年経ってついに習った字で妻にラブレターを渡すのだ。涙なしで読めないが、西畑さんの向上心と誠実な人柄に感銘を受けるとともに、夜間中学の存在意義を改めて考えさせられる。

『椋鳩十（むくはとじゅう）と戦争 ～生命の尊さを動物の物語に～』

多胡吉郎（書肆侃侃房）

今村 三郎

子どもが本を読まなくなったといわれて久しい。でも実は、以前より多く、読まれています。それは授業前の朝読書運動が広まってからだそうです。同じように、「母と子の20分間読書運動」を提唱し、活動した人に、椋鳩十がいます。

椋鳩十といえば動物物語で有名です。『大造じいさんとガン』『マヤの一生』『孤島の野犬』などが知られています。その中でも、『マヤの一生』が心に残っています。戦争のため撲殺される飼い犬の話です。またこの本で紹介されている『港街の老夫婦』。ノルマンディーで亡くなった英国人の19歳の息子。珠玉の小編です。

多胡は言っています。「椋の動物物語は決して『説教』しない。こころあたたまる話に、読者は素直に惹きこまれ、感動させられる。」

私もこれから、朝読書を続けましょう。昔から、「継続は力なり」と言いますもんね。

『『女工哀史』は生きている 細井和喜蔵と貧困日本』

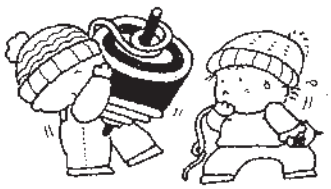
松本満、斎藤美奈子 共著
（岩波ブックレット）

荒井 寿恵

１９２５年、男子普通選挙が実施され、治安維持法が施行された。同年に『女工哀史』が改造社から出版されてベストセラーになった。

大正時代には、「『哀史』とは、単に『哀しい歴史』というのではなく、その背後には貧困があり、その貧困の原因は個々人ではなく社会にあるとの認識が含まれていた」という。

和喜蔵は11歳で丹後ちりめんの機屋を振り出しに、女工の生活を見ていた。労農派の猪俣津南雄の妻ベルは、「十数年の労働生活から掴み取った新しい人生をしっかりと右手に握りしめ、底から押し上げた穴蔵の蓋を左手に支えながら、古い社会を見回しているようなのが細井さんだった」と書いたそうだ。亀戸の東京モスリン退職後の文筆活動を支えたのは、事実婚をした女工のとしをだった。『女工哀史』出版の一か月後に和喜蔵は28歳で病死した。「彼のやり残した仕事は、１００年後の今日、もう成し遂げられたと私たちは彼の碑前に報告できるだろうか」と松本氏は問いかける。



『誰も知らない東大寺』
第212世東大寺別当
筒井寛秀（小学館）

石川　千尋

テレビで超国宝展を見ていた時に、運慶作と伝えられる東大寺蔵の重源上人坐像に魅きつけられた。

本書には、東大寺再興のために尽力された大勧進重源のことを別当の優しい眼差しで書かれていて、ページを捲るのが愉しくなる。その中に「重源さんの風呂」の章がある。再興用の木材を山口県徳地に求めた際、労働者達の慰労のため、あちこちにサウナの様な石風呂を作ったと書いてあった。重源の優しさが名仏師に伝わったのかもしれない。

『仮面の告白』
三島由紀夫著（新潮社）

関　美智子

この本は著者24歳の最初の書下し長編。内容はある青年が、幼年時代からの自己の宿命を凝視しつつ述べる告白小説。

前書きにドストエフスキー『カラマーゾフの兄弟』―美―についての一文が置かれ、読者を物語への世界へと誘う。この話は青年が震災の翌々年に生まれた時よりはじまり、性と死が描かれている。特に若き男性の身体の描写の美しい表現は見事である。今年は著者の生誕100年目、没後55年にあたる。追悼としてお勧めしたい本である。

『「ボランティア」の誕生と終焉〈贈与のパラドックス〉の知識社会学』
仁平典宏（名古屋大学出版会）

猪原　康一郎

ボランティアという自発的な行為は社会貢献、自己成長、果ては福祉費削減の政策利用というシニカルな視点の文脈で語られてきた。著者はその贈与的性格を肯定しつつ一方偽善という、うがった眼差しは完全に消えることは無いが、その倫理的正しさの実在よりも、それが貶（へん）価（か）する偽善に賭けると主張する。本来、行政がやるべきものをなんで？と引っかかりを覚える方は是非一読ください。その歴史的経緯から有識者の見解を含めて丁寧に解説されています。

『雑誌『月刊社会教育』2025年4月号 特集 公民館入門 ―国立市公民館に学ぶ』
（旬報社）

宮武　光吉

創立70周年を迎えた国立市公民館のことを、55ページに及ぶ特集で飾った本誌が印象に残った。

巻頭エッセイで、小林文人氏が自身の関わりを通じ、沿革と共に、将来への提言をしているのを始め、12名の執筆者が様々な角度から、本館の姿を浮び上らせている。特に、外部の参加者を交えた座談会では、公民館の魅力を語っていて「学ぶことはつながることと地続きである」ことが示されているのが、心に残った。更なる発展を願っています。

『白痴1～3』
ドストエフスキー（河出文庫）

鍛治　勝

2010年、いきなり文庫本で刊行された、河出文庫『白痴』の新訳は、買いです。

情景、人物、心理描写の細部にいたるまで、稀代の正直ものが起こす波乱を、みがきぬいた現代日本語で、質を落とさず、テンポよく、翻訳することに、成功しています。

せっかくの名作を、あらすじだけ追って、わかった気になるのと違い、一字一句の味読を約束する出色（しゅつしょく）のできばえ。21ページにわたる解説も優れています。

『母親になって後悔してる、といえたなら 語りはじめた日本の女性たち』
高橋歩唯・依田真由美（新潮社）

田久保　薫子

8歳児との日々「辛い、この状況から逃げ出したい」と叫び出しそうになったことは数知れません。そんな私が「今が幸せ」と思えるようになったきっかけに公民館の「女性のライフデザイン講座」があります。皆で集い、これまでの歩みや将来について語り合いました。本書も皆で読みました。「ワンオペ状態で母親の役割を全うすることが辛い、語り合う場が必要」との意見に。性別、子どものいるなしを問わず皆で読み合いたい一冊です。

『古典のすすめ』
谷知子（角川選書）

大井　利雄

筆者は、和歌を中心に古典文学を研究している。著書のはじめになぜ古典を学ぶかは、よりよく生きるためと、次のように述べている。

人は、最期のとき、何を思うか。死のときは恐怖です。この死の瞬間を悔いなく迎えるために人は生きているのかもしれません。

（次ページへ続く）

人生は長いようで、短いもの。限りある時間を深く、最期の瞬間に、自分なりに豊かな人生を生き抜いたと思えるようにしたいとは、多くの人の願いでしょう。時代が移り変わっても、人の営みの本質は変わりません。

この世に生まれ、様々な教育を受けて、大人になり、働き、恋をし、結婚し、様々な人生の重要な決定をし、老いて、死んでゆく。この営みは、いかに人工知能が発達しようと、大きく変わることはないでしょう。

人が人たりうるのは、名前があり、理想や美という概念を持ち、自然や日本ということについて思考することという、文化的な行動をする存在です。

こうした人生の重要な出来事や思考について、日本の古典文学は長い間知恵と力を読者に与え続けてきました。

本書は、生きる上で力強い英知を与える普遍的なテーマについて、時代やジャンルを超えた多くの古典作品の哲学が解説されている。新しい視点で、古典の豊饒の世界を味わうきっかけを得るガイドとなるだろう。

①『荻野恭子のシルクロード・食のぐるり旅　世界の粉物とスパイス料理』

荻野恭子（朝日新聞出版）

②『ヴィジュアルで見る歴史を進めた植物の姿　植物とヒトの共進化史』

河野智謙（グラフィック社）

黒川　祐子

①なぜか懐かしいインドの麦畑のカバー写真。美味しそうな粉物料理の写真とレシピは、お好み焼・うどん好きには見逃せません。

著者は半世紀に亘りシルクロードと周辺地域の粉物とスパイス料理を訪ねてきたそうです。中国の餃子、餅ビン、麺が各地に伝わり根を下ろしスペインのエンパナーダにまで。新大陸の唐辛子は海のシルクロードを通じて中国の四川料理へ。

ユーラシアを越えてつながり広がる食文化を楽しみましょう。

②植物とヒトの相互の関わりが地球と歴史に果たした役割、今後の可能性も興味深いものです。

植物はヒト登場以降、主食、さらに嗜好品や園芸品として、ヒトが利用しやすいように、あるいはヒトの好むように改変され、一方で経済や文化にも影響を与えてきました（この本に使用された１８００～１９００年代の精緻な図版からも読み取れます）。

今後、食糧やエネルギー、環境の問題を抱えたヒトと植物はどう関わっていくのでしょう？

『奇跡の椅子　AppleがHIROSHIMAに出会った日』

小松成美（文藝春秋）

新田　雅司

昭和３年に創業され、家族経営で「工芸の工業化」をモットーに、匠の家具作りを行ってきたマルニ木工は、バブル崩壊で倒産の危機に。が、あきらめずに外部のデザイナーを活用したプロジェクトで製作した椅子が見本市で注目を集め、次いで著名な日本人デザイナーの手を借りてミニマルデザインの椅子を作り上げる。これが米アップル社の目に留まり、新棟すべてに採用されることに！ まるでプロジェクトXの世界に感動です。

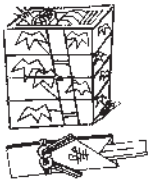
『時評でみる経済近影・遠望』

入来院重建（メトロポリタンプレス）

加藤　久美

これは２００５年から２０２１年までに共同通信内外で書かれている経済時評。間に民主党政治で国のスリム化を、後に自民党政権下でアベノミクスが続いた。この本によれば自民党の発表とは随分異なった判断で日本経済の破綻が語られている。

暗い将来の日本に唯一明るさがあるとすれば初の女性首相の放つ言葉である。朝日新聞によればほぼ50％の国民によって祝福された首相がやる政策が私の長い間自民を選んだ後悔を拭い去る。



公民館図書室休室のお知らせ

蔵書点検のため、休室します。ご理解とご協力をお願いします。

―休室期間―
1月27日（火）～ 29日（木）まで

※新聞は、休館日の月曜を除き
朝９時から夕方５時までの間
１階ロビーで閲覧できます。

ブッククラブから

小山田浩子著『工場』―疎外感と変身―

東　健太郎

小山田浩子の小説を読むのは初めてでしたが、実に面白かったです。本作はデビュー作ですが、この後に発表された芥川賞受賞作『穴』よりもスケールもインパクトも大きく、ユーモアもあり、こちらの方が優れていると思いました。

まず、３人の語り手が交互に語るスタイルが斬新です。しかもその区分けを一人称代名詞の違いで表すという発想が面白いです。牛山佳子は「私」、古笛は「僕」、牛山（兄）は「俺」となるわけです。

この３人は契約社員、正社員、派遣社員と身分はそれぞれ違いますが、会社にとってほとんど役に立たない仕事をしている点で共通しています。その自覚があるので、生活の保障があっても心の中は暗澹たるものでしょう。しかし、現代社会ではこの３人に限らず自分の仕事が社会に貢献していると感じられない人は多くいるはずであり、そういう社会から疎外された労働者の心の虚しさを描いているともとれるでしょう。

そういう虚しさを抱えていると、人間は人間でいられなくなるということでしょうか？

ところで、寒川少年とその祖父が作成した「工場の中の生き物の研究」によると、工場には固有の生き物として灰色ヌートリア、洗濯機トカゲ、工場ウが生息しているとされています。

牛山佳子はラストで「私は黒い鳥になっていた。」と語ります。衝撃的な述懐ですが、これは彼女が工場ウに変身してしまったということでしょう。そういえば本作の冒頭で「工場は灰色で、地下室のドアを開けると鳥の匂いがした。」とすでに伏線が張られていたことに気づきます。鳥となった佳子は中年女性に抱えられトナーとして使われ、使用済ウとして川に放たれるのでしょう。

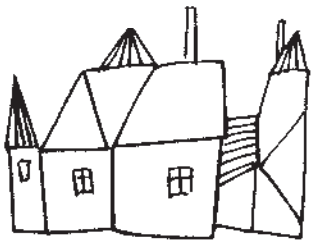
一方古笛も、上記の観察記録を読んだら手にもどこにも体中に毛が生えてきたと語っています。これは灰色ヌートリアに変身したということでしょう。

ところが、他の２人と違って牛山（兄）は変身する様子がありません。何故なのでしょう。私にはわかりませんでした。

深津講師はこの点に関して、牛山佳子と古笛は内向的で自己表現が上手くなく、工場が求める主体像からずれているため、「ある」のに「ない」こととされている工場固有の動物と同じだという自覚があるのに対し、牛山（兄）は向上心があり、工場が求める主体像に近いのでそれらの動物と自分とは違うと思っているからだと解説されました。この３人の疎外感は同じだと思っていましたが、そこに差異があるとの指摘はよく読んでみるとその通りで、私の読みの浅さを実感するとともに、その注意深く正確な読解に感銘を受けました。このような素晴らしい解説を聞けたことは大いなる喜びです。解説資料も６ページに亘った詳細なもので、これだけで卓越した「工場」論になっていると思いました。本作は刊行されてから10年ちょっとしか経っていず、研究論文もほとんど無いでしょうから、この資料は実に貴重なものだと思います。

ある参加者の方が、この当時と違って今はＡＩが活用されているので職場が変わってきている、と指摘されていました。まさにそうで、ＡＩがさらに発展すれば大量の失業者も発生するでしょう。その先のＡＧＩ（汎用人工知能）が完成するまであと少し、という説もあります。そのような時代を彼女ならどのように描くでしょうか。疎外感に敏感な作家ですから、バラ色には描かないかもしれません。その小説をぜひ読んでみたいものです。

（新潮文庫）



講座参考図書

講座詳細は公民館だより
＼＼12月、1月号をご覧ください／／

〈シリーズ戦後80年〉いまこそ、考えたい戦争と平和
語り継ぐ戦争～被爆者からあなたに、戦後80年をこえて～

１月～３月にかけて３回連続講座を開催。被爆者の手記をもとに体験に触れ、日本被団協のあゆみを知る中で、私たちができることを考えるヒントを得る機会としたいと思います。

＊被爆者からあなたに―いま伝えたいこと …… 日本原水爆被害者団体協議会編（岩波書店）
＊被爆者たちの戦後50年…… 栗原淑江（岩波書店）
＊〈戦争体験〉を語り継ぐ人びと「くにたち原爆・東京大空襲体験伝承者」調査報告 ……
根本雅也編（オリンピア印刷株式会社）

地域で日本語支援をしたい人のための日本語教育入門

1月～2月に8回にわたり開催。外国にルーツのある方々の日本語学習をサポートしたいと考えている方のための講座。

＊やさしい日本語　多文化共生社会へ …… 庵功雄（岩波書店）
＊移民の子どもの隣に座る　大阪・ミナミの「教室」から …… 玉置太郎（朝日新聞出版）
＊日本語とにらめっこ　見えないぼくの学習奮闘記…… モハメド・オマル・アブディン（白水社）

〈私の本棚から　第４回〉

中村 颯希（さつき）著
『神様の定食屋』

川越 彩心（あやみ）

新年あけましておめでとうございます。皆さん初詣にはもう行かれましたでしょうか。というわけで今回は、今の季節である冬と神社に関係する物語、『神様の定食屋』を紹介します。

この物語は、両親を事故で失い、突然実家の定食屋を継ぐことになった２人の兄妹の物語です。主人公である兄・哲史（てつし）は、最初こそ定食屋に関わるつもりはなかったものの、妹に押し切られる形でこの定食屋の手伝いをすることになります。しかし、ここで大きな問題がありました。哲史は、料理が全くと言っていいほど出来なかったのです。みじん切りと千切りの違いも分からない、料理にキャベツを添える時には適当に１枚むしってお皿に乗せる。落し蓋をしろと言われようものなら鍋の上から直接蓋を落とす。料理が好きな人ならまず悲鳴を上げるであろうおぞましい行動の数々に、料理上手な妹は烈火のごとく怒り、喧嘩になった挙句、哲史は店を飛び出します。そうして頭を冷やそうと歩いているうちに、哲史はある神社に出会います。そこで彼はふとこぼすのです。「いっそ誰かに体を乗っ取ってもらって、体感的に分かりやすく料理を教えてほしい」と。すると、「あい承知した」という声がどこからともなく響きました。なんと本当に神様が現れたのです。さらにその神様は、「料理上手な魂を憑依させてやるから、その魂の未練を解消しろ」と条件付きで願いを叶えてくれました。そうして哲史は、未練を持つ魂を通して料理と向き合っていくうち、料理への姿勢、そして心の在り方そのものも変えていくのです。

哲史に憑依させられる魂は、料理も世間話も大好きな主婦から、その道のプロまで、本当に様々です。しかし、そんな個性豊かな魂たちには、ある共通点がありました。それは、「自分の大切な人に、最後にもう一度あたたかくて美味しいご飯を作ってあげたい」と願っていること。生き別れ、もう二度と会うことの出来ない大切な人に、哲史の体を通してでも良いから想いを伝えたい。就活に失敗し、真面目さ故に自分を責めて引き籠ってしまった息子に、好物だった「南蛮チキン」を作って励ましたい。病気のことを伝えられず独り残すことになってしまった愛弟子に、昔作ってやった「天たま掛けご飯」を作ってやりたい。

そんな彼らの想いは、ご飯を通して、大切な相手に、そして哲史にも伝わっていきます。あたたかくてほっとするこの物語を、是非新年の幕開けのお供にしてみてはいかがでしょうか。

（双葉社）

くにたちブッククラブ

―自分と「似ているもの」/「似ていないもの」―

三島由紀夫『金閣寺』
（新潮文庫）

講　師　大木 志門
（東海大学・日本近代文学）
と　き　1月8日（木）
夜7時半～9時半
ところ　公民館 3階講座室
申込先　公民館 ☎（572）5141

＊今年度のブッククラブは
今回が最終回です。

ブッククラブ HP